史料紹介

安産と子育て

――「安産の方角」・「子育艸」・「よいこの子もりうた」――

菅野則子

(1)『安産の方角』

これは、沼津の本陣をしていた家に遺されていたものである。慶応三年、「世寿軒」銘で施板されたもので、産婦が出産に臨み、どの方角に座したらよいのかを示した。前文に、三日三晩難産で苦しんだ産婦がいたとき、彼女の座する方角を改めたことで直ちに安産することが出来たという。そのことを見聞して以来、それを人々に伝えてきたが、例外なくみんな安産を得ている、そこで、広範な人びとに向けて安産を期したいとして、吉方の方角を示した。

一種の占いであろうが、後文で、天保以来知っていたことであったが、数年間試してみたが、みな的中するので、「報国の微志」ながら、これを上梓するとしている。このようなものが板行される背景には、難産に悩む産婦が少なくなかったのであろう。

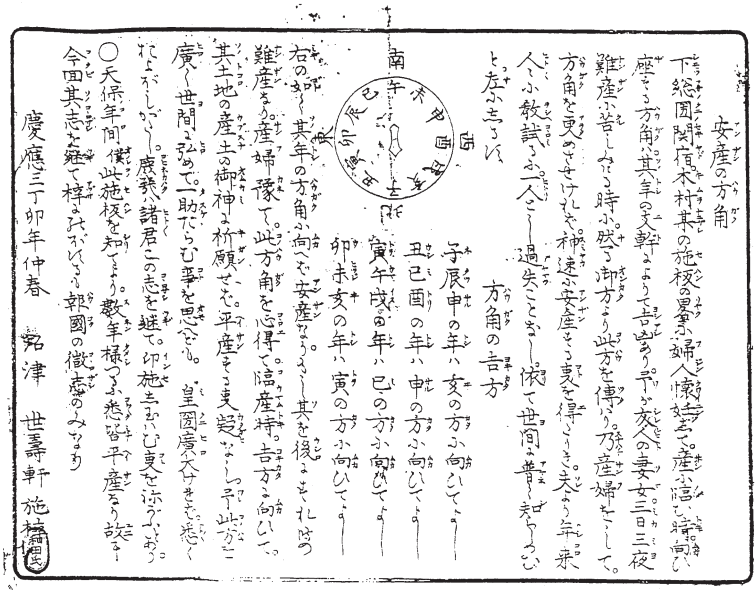
安産の方角

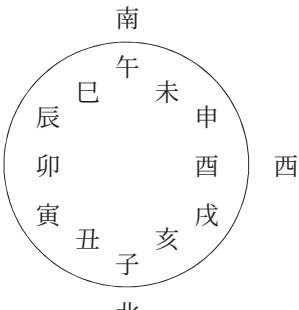
下総国関宿、木村某の施板の畧に婦人懐妊して、産に臨む時向ひ座する方角ハ、其年の支幹によりて吉凶あり、予が友人の妻女、三日三夜難産に苦しみける時に、然る御方より此方を伝ハり、乃産婦をして、方角を更めさせければ、神速に安産する叟を得たりき、夫より年来人々に教試るに、一人とし過失ことなし、依て世間に普く知らしめむと、左にしるす

方角の吉方

子辰申の年ハ亥の方に向ひてよし
丑巳酉の年ハ申の方に向ひてよし
寅午戌の年ハ巳の方に向ひてよし
卯未亥の年ハ寅の方に向ひてよし

右の如く其年の方角に向へば安産なり、もし其を後にすれば難産なり、産婦豫て此方角を心得て臨産時、吉方に向ひて其土地の産土の御神に祈願せば、平産する





支疑なし、予此方を広く世間に弘めて、一助たらむ事を思へども、皇圀広大ければ、悉くおよぼしがたし、庶幾ハ諸君この志を継て、印施し玉ハむ支をねがふとあり

○天保年間僕此施板を知てより、数年様つるに悉皆平産なり、故に今回其志を継て梓にのぼするも報国の微志のみなり

慶応三丁卯年仲春　沼津　世寿軒　施梓（印）和田氏

(2)『子育艸』

この報條「子育艸」（こそだてぐさ）は、東京薬研堀の桑田衡平によって編集され、明治九年に、書林東京日本橋丸屋善七　同馬喰町島屋利助によって発行されたものである。子供をもった女性たちに向けてつくられた子育ての書とでもいうべきもので、子育ての「いろは」を記している。さしづめ今でいうヤングママ向けに編まれたものであろう。このビラの欄外左下には「三銭五厘」の定価がつけられている。

生まれたばかりの乳児の扱いについて、衣服・食物・運動・入浴・種痘・持薬の六項にわかってそれぞれについてやさしく解説した「育児書」ともいえる。この「子育艸」の原版は、三七糎米×五二糎米の大きさのもので、色彩豊かに描かれた絵柄が紙面にちりばめられており、チョット手に取ってみたくなるようなものである。どのくらいの部数が発行されたのかはわからないが、漢字にはふり仮名がていねいにつけられている。

たとえば、発疹（ふきでもの）、半身浴（こしゆ）、

古来（むかしより）、襯衣（はだぎ）、頭部（つむり）、刺戟る（しミる）、上衡る（のぼせる）、適宜き（ほどよき）（以上A）、身体（からだ）、綿布（もめん）、実母（うミおや）、米粥（かゆ）、初生児（うまれご）、遺伝（おやゆづり）、便秘（ふつうじ）、衣服（きもの）、下痢（くだしぐすり）（以上B）などなどである。

これらの漢字と読みとの関連をみると、当時の人びとの日常生活の中における用語のあり方がよくわかる。古来からあった言葉、日々の生活の中にとけ込んで用いられている言葉が漢字で表記されるとどうなるのか(A)、また、逆に、本来の漢字言葉が日常生活の中でどのようにいい慣わされていたのか(B)、といった生活の細部にわたる用語の使われ方、その多彩さが見えてくる。だから、史料を見ていくときには、ふり仮名にも注意したい。単に文字を読みやすくするというだけではなく、日常生活の中に溶け込んでいるゆたかな表現、用語の多様性にあらためて目を留めてみる必要があるようだ。

子育艸

第一　衣服の事

一衣服ハ厚着に過すべからず、常に厚着に習ハすものを卒かに薄着にすることあれバ直に風邪を冒くものなり、ほどよく薄着にならすべし、又寒気つよきせつ外より冷へて帰り急にこたつあんかの火にて温むるハ宜しからず、①驚風などの病を誘起すことあり、必らず人肌にて漸々に温むべし、凡て小児の身体ハ日々夜々に生長する、勢盛りにて常に手先など冷ゆるを厭ハぬほどのものゆへ、温め過すハ却て宜しからず、又初生児にハ襯衣に毛織の物を用ひべからず、柔軟なる綿布にて裁て襟肩寛かなるをよしとす

第二　食物の事

一乳ハ生れて凡そ八時を過れバ直に実母の乳を授けべ

し、まくりを用ひるに及バず、必らず他人の濃き乳汁よりハ産婦の薄き乳汁をのますべし、是れ小児の為にハ黒便の通利をよくし、産婦の為にハ乳汁の分泌をよくし蓐熱の患を除き両全なり、健康なる小児ハ生れて三箇月の間ハ晝夜とも眠りがちなるものなれバ、晝の内ハ少なくも二時間に一度づゝハ必らず覚してのますべし、三箇月をすぐれバ三時宛間をおきてのませ、のませて少しの間ハ静かにすべし、漸々生長して八九箇月を過ぐれバ歯のはへるをまちて米粥を軟かに製ひ、日々分量と時とを定めて用ひ、漸々に乳汁を廃めさせて他の食物にならすべし、乳汁のミを永く用ひるハ却て宜しからす、又小児ハ菓子を好くものなれハ強て禁めべからず、大人の油膩肉類を食すると同じ理のものなり、又乳汁の少なき小児に牛乳を用ひるにハ、まづ清き水に砂糖を少し加へ煮沸て泡沫を去り、或ハ布巾にて漉し、此水二杯に牛乳一杯を交ぜのますべし、しかし人ハ人の

乳汁にまさるものなし

第三　運動の事

一天気の長閑なるときハ、日々負ひ抱き、又ハ小車にて戸外に逍遙させ、春秋など暑からぬせつハ、直に日光に触るをよしとす、又屋内に居るときハ高声つよき音を避け、窓を少し開きて空気の通暢をよくし消化のよきためにはへゑづさりさせ、又ハ歩き習ハすべし

第四　月代幷に入湯の事

一頭髪ハ決して剃るべからず、小児ハ別て驚風其外頭部の病を発しやすきものなれバ、必らず生髪のまゝにて髪を生しおくべし、度々剃れバ風又ハ暑さ寒さの刺戟ることつよく却て上衝るものなり

一湯ハ毎日一度づゝ浴わせ、風邪などのせつハ半身浴をすへし、永く入湯せざれバ潰爛発疹の患あり、必らず熱き湯を浴ハすべからず、父母ハ元来熱き湯に慣れて自身に適宜きも小児にハ熱過るものなり、又初生児にハ入湯のせつ石鹸を用ひへからず、別て眼に入らぬよふ注意すべし

第五　種痘の事

一種痘は生れて二箇月より三箇月の間に種べし、必らず暑さ寒さ雨風なとを厭ひて遅延ることなかれ、但し悪き疱瘡の流行るときハ三七夜位にて種てよし

第六　持薬幷に灸治の事

一古来世に胎毒下しと唱ひ常に丸薬の類を用ひるものあり、惑へるの甚だしきなり、仮令生得瘰癧[3]又ハ遺伝の楳毒などありとも大便を下して其毒を去るものにあらず、空しく身体を衰弱かすのミ、況て常に下剤を用ひるときハいよ〳〵便秘癖となり、一日も下剤を用ひざれバ通ずることなきにいたる、是れ第一

自然にそむくものと知るべし、又むしおさへと唱ひ
常に揮　発　薬を用ひることハよろしからず
一　灸治は禁厭に斉しきものにて、常に灸治をするとも
決して病の起らぬよふ予防にもならず、徒らに愛児
を苦しめ善良正直なる心をして僻念を生ぜしめ智恵
発達を妨げ精神を擾乱して却て病を誘起することあり

㊟

① 驚　風＝漢方医学でいう小児病の病名、脳膜炎
② まくり＝海人草の別名、カイニン酸を含み、回虫駆除の民間薬として煎じ薬に使われる
③ 瘰癧＝頸部リンパ節結核の古称、結核菌が顎下部・側頸部・鎖骨上窩などのリンパ節に入り結節を形成、次第に乾酪化、化膿してできものとなる

(3)『よいこの子もりうた』

武蔵国の陳松軒という人が耳にした歌が、子どもの教育のためになるということで、安政七年(一八六〇)に、それを「よいこの子もりうた」と題して出版した。それが巷間に広く伝播したのであろう、ここに示したものは、沼津のある家に遺されていたものである。

韻をふみ、わかりやすい言葉で綴られ、漢字には適宜ふり仮名が施されており、文字どおり「子ども衆」に向けて編まれている。

内容は一読してわかるように、子供がどのようにして産まれてくるのかといったさしずめ現代版性教育に始まり、朝起きたら身を潔め、先祖をまつり親の言いつけを守ること、読み・書き・そろばん・より・織り・裁縫をすること、倹約をすること、働くことが親孝行になること、我侭勝手をしないこと、欲張らないこと、奢侈をしてはいけないこと、夫婦仲良く兄弟を憐れみ、

親類友人をはじめとするつきあいを大切にすること、家内を修めることが大切であり、ともかくも若いときから精を出して働くようにといったような事柄が、巧みに織り込まれている。

江戸時代、庶民の子供たち、必ずしも女児に限られているのではなく、五・六歳ともなると、「子守奉公」に出されることが多かった。「よいこの子もりうた」は、子守をされる子どもにというよりは、子守をする子供たちに向けて編まれたものである。五、六歳の頃から、時にはもっと低い年齢の場合もあったと思われるが、このような歌を節をつけて口ずさむことによって、そこにもりこまれている内容が、おのずとうたう者の身に染み込んでいったに違いない。働きながら日常生活の規範を子供たちに体得させていくものであった。寺子屋とか往来物といったいわゆる教育機関、教科書とはちがった、耳からの学習の初期教育の一資料として流布、子供たち、とりわけ女童の精神涵養のための格好の素材でもあった。

よいこの子もりうた

ありがたいぞや泰平の　御代に生れちゃ一ぱんに能
此のうたを覚ゆべし　美い子や〳〵よいこじゃな　善い子ハどふして出来たのじゃ　おとさんとをかさのお睦で　天の御胤がふしぎにも　をかさの御腹にとゞまりて　十月の間だの御くらうで　生れましたよ能をこは　よい子や〳〵よい子じゃな　親の御恩のおめぐみを　忘れちゃならないよいをこハ　朝をきたらバ身をきよめ　元のちゝはゝおがむべし　おとさんとをかさのいゝつけを　背いちゃならないよいをこハ　よい子や〳〵よいこじゃな　手習よみものそろばんや　よりをりたちぬいそれ〳〵に　ならハにやならないよいをこハ　よい子や〳〵よい子じゃな　朝夕きをつけけんやくし　拝げハふじゆふなき事ぞ　喰と着とに雨かぜの　凌ぎも苦もなく成ときハ　親々安心孝行ぞ　よ

いこや〳〵よいこじゃな　餘り自由がたりすぎて　物事気まゝになる時ハ　知れたる事でもきも付ず　命にかぎりのあることも　欲にハかぎりのなき事も　我まゝ長じて天ばつを　受けてもしらざる人もあり　油断ハならないわがこゝろ　夫故をしへハ聞がよい　侈る心のあるひとは　克見よ子孫ハなんぎする　よい子や〳〵よい子じゃな　夫婦の中よくむつましく　兄をうやまい　弟　を　あわれむ心をふかくして　親類ゑんじゃハさてをろか　友達他人にいたるまで　実を尽して中をよく　するならをやたち悦びて　其身も楽々暮すべし　よいこや〳〵よい子じゃな　人のよしあしいふならバ　明ても昏てもやかましい　よしあしいわずに面々に真とを尽して働らけば　天の命にかなふゆへ　家内も中よく脩りて　極楽住居になりまする　よいこや〳〵よい子じゃな　年寄後悔せぬやうに　若きときよりこゝろえて　よく〳〵勢出し動けバ　夫こそ真事によいこじゃな　此哥精出し唄ふなら　自然と

よい子になる事ハ　努々真違なきことぞ　是ミな和哥の徳ぞかし　さあ〳〵勢出し諷ふべし　よい子や〳〵よい子じゃなァ、

安政七庚申正月　武　三芳野北　川嶋里

陳杰軒（花押）

或友に聞し哥にて子供衆の為になるかと弘ふするなり、